中高年期シングル女性の親子関係と老後設計

○大風薫（お茶の水女子大学）

1. 研究の背景と目的

配偶者を持たないライフコースは現実的な選択肢として確立された状況にあるが、経済的リスクを伴う可能性がある。阿部(2018)によれば、勤労世代(20-64 歳)の未婚女性の貧困率は 17.0%、離別女性は 32.3%に達し、高齢期(65 歳以上)では、未婚者 32.6%、離別者 40.3%である。女性は男性に比べて賃金水準が低いため、現役世代であっても定年後であっても十分な収入を得にくい。さらに、成人のシングル女性は親との同居率が高く、同居によって、家計管理行動が抑制されたり(大風 2018)、家計に対する関心が高まらないことも報告されている(大風 2017)。将来の貧困リスクを考慮すると、シングル女性の経済状況や老後設計について、詳細に検討していくことが必要と考える。

そこで本研究は、中高年期以降のシングル女性たちへのインタビュー調査から得た語りをもとに、彼女たちの老後に向けた生活設計状況とそこに関わる若年期から持続する／変容する親子関係の様相を明らかにすることを目的に行う。成人未婚子の親子の経済関係は加齢とともに変化し、若年期は成人子と親の収入は逆相関するが、壮年期ではそのような傾向が見えにくくなる(白波瀬 2018)。親が加齢し年金が主たる収入源になった場合、シングル女性の家計への貢献程度や親への依存状況の変化、そのような変化による老後設計への影響を検討していく。

2. 研究方法

調査会社が有するネットワークおよび NPO 団体の協力を得て調査協力者を募り、31 名の中高年期シングル女性に対して、2017 年 2 月から 2019 年 3 月にかけて半構造化インタビューを実施した。調査実施にあたり、お茶の水女子大学倫理審査委員会の承認を受けた。調査対象となり得る条件は、首都圏在住、年齢 40～70 歳未満、現在配偶者がおらず、調査時点で両親あるいは片親が健在の女性たちである。インタビューの所要時間は約 1.5～2 時間であり、録音したデータを後日テキスト化し分析した。

3. 結果の概要

本調査の分析からは、まず、女性自身の資源が少なく加齢してもなお親に依存し続けざるを得ないパターン、自身に一定の資源を保有しながらも親の経済力へ期待し続けるパターン、決して豊かとは言えないながらもわずかに資源を蓄積し親への依存状況から脱却を果たしたパターン、十分な資源を蓄積しむしろ親への経済的資源提供を行っているパターン、自身の資源を親へ提供し自らが経済的困難を抱えるパターンといった、シングル女性間の差異の様相を導くことができた。そして、シングル女性の保有資源の蓄積状況には、職業キャリアやコーホートとともに、長期的な親子の相互作用も関係を及ぼしているようであった。

また、老後の生活設計については、漠然とした不安を抱える対象者は多いながらも具体的な対処行動を取ったり将来展望を描けているケースは多くなく、特に不十分な資源しかない女性においては、検討を先延ばししていたり、検討そのものを他者に依存したい様子もうかがえた。以上のような内容を中心に、本報告では、シングル女性の生活設計について、親子関係を中心とした視点から議論していく。

※本研究は、平成 28 年度科学研究費助成事業(研究活動スタート支援　研究課題名：独身女性の生活設計と親子関係、課題番号：16H06797)および平成 30 年度科学研究費助成事業（若手研究　研究課題名：中年期の無配偶女性が抱える高齢期に向けた貧困リスク、課題番号：18K13033）の助成を受けた。

キーワード：中高年期シングル女性、老後設計、親子関係